

“社会全体が支える豊かな森林づくり”を進めよう!

平成21年度
しずおか森林写真コンクール
「最優秀賞」作品



■表紙写真 題名：環境に配慮 撮影場所：静岡市葵区田代 撮影者：高山 欣也氏（静岡市）



© 静岡県

INDEX

本誌はホームページでも掲載しております。是非ご覧下さい。URL：<http://www.morito hito.jp>

- 2 首長は語る(No.19)
富士山の上に住んでいる
- 3 森林・林業研究センターだより(No.66)
活躍するモンキードッグ
- 4 県庁だより①
住民参加で減災を促進
- 5 県庁だより②
林業フェスタ 山・森・人
- 6 支部だより①
放置された間伐材を活用した緊急雇用創出事業

- 7 支部だより②
沼津のシンボル 千本松原
- 8 林政ニュース
「治山セミナー」の開催
- 8 告知版
農林大学校入学生を募集!
- 8 事務局だより

別冊折込

平成21年度しずおか森林写真コンクール入賞作品

首はる 長語

No.19

富士山の上に住んでいる

富士市長 鈴木 尚



不動の求心力

富士市の市域は、富士山の標高3,000mの九合目から0mの駿河湾までと広大で、古くから富士山の豊富な地下水の恩恵で製紙等の産業が発展して来ており、富士市は富士山と一体であります。

この富士山をテーマに、「自然と人々の共生」を考えて、産業都市と自然環境を守り、継承の上で将来を見据えた施策が必要です。また、昨年11月に旧富士川と合併しまして、これからは、従来の都市構想に旧富士川町で大切に守られてきた伝統や文化を継承し、観光も取り入れて推進していきたいと考えております。

こうしたことから、現在、「第五次総合計画」を策定中ですが、市内26地域で市民の皆さんがそれぞれ考えて頂き、その意見を取り入れながら、富士市の将来構想を創っていきたく考えております。

これは、地域の皆さんが自分たちの課題を自分たちで議論することにより「地域力」が高まり、行政と地域の皆さんとの協働が出来てきます。

また、協働は対等な関係でなければならず、押し付けであってははいけません。と思っています。

そしてその際に、富士山は市民の皆さん共通の「不動の求心力」になっていきます。



▲ブナの植樹

環富士山

富士市の観光資源には、滞在型の観光素材が少ないことから、富士山をより近くで認識していただくことが賑わい創出に役立つと考えております。富士山をロケーションとした景色、例えば、梅や桜、あるいは、お茶畑から富士山を観るなど、写真撮影場所としてビューポイント百箇所を選定して「富士山百景」をつくり、写真コンテストを実施しています。それによって富士市に大勢の方が訪れ、写真も活用されて県外・海外でも喜ばれております。



▲富士山麓線（富士山百景）

また、富士山の裾野に住む我々は、いつでも富士山と一緒にという意味でも「富士山の上に住んでいる」と思っています。地域の皆さんが、富士山の清

掃や森づくりに自主的に参加してくれているのは、富士山を守って行こう、継承していこうという意識が「地域力」となっています。

しかし、富士山は富士市だけでは守れないので、周りの市町で連携を持つべきではないかと「環富士山」を掲げ、静岡県側の富士山を取り巻く4市2町でネットワーク会議を立ち上げ、観光・産業・政治等を含めて首長会議を行い、観光資源を繋いで広域連合の中で進めています。

昨年11月に新設された「富士山ナンバー」も、静岡県の4市2町、山梨県の1市2町4村の方々の共通のナンバーにしていこうという意識は、環富士山構想という中で連携を持って取り組んできた結果と考えています。

富士ヒノキと落葉樹

富士市の森林は、8,000haが富士ヒノキの針葉樹林で伐期を迎えており、利用促進のうえで、公共施設、例えば校舎や机に活用していけるような予算付けをしています。今後、住宅の補助金制度を設けて富士ヒノキを活用するため、富士市地域材利用推進協議会を立ち上げ、生産者、木材業者、建築業者、消費者団体の代表者に委員になっていただき、今後の制度を検討中です。



▲富士ヒノキを使ったパソコンデスク(林政課)

また、消費者に木の良さを是非見直していただき、価格等で問題があれば行政が出来るだけのサポートをしていかなければならないと考えております。

そして、この富士ヒノキを活かす他に、これからは落葉樹等が混在した山も管理し、環境面でも、また山を楽しむ上でも、「少しは人工林に変化をつけてもよいのでは」とも考えています。

活躍するモンキードッグ

研究スタッフ（森林育成） 大橋 正孝

今、訓練を受けたイヌを利用してサルによる農林作物被害を防ぐ「モンキードッグ」が脚光を浴びています。今回は、モンキードッグとはどのような訓練を受けたイヌなのか、また、効果を高めるポイントなどについて解説していただきました。

モンキードッグ誕生

「モンキードッグ」とは、ニホンザルを追い払う訓練を特別に受けたイヌのことです。平成17年に全国ではじめて長野県大町市で希望者3名の飼い犬3頭が警察犬訓練所で訓練を受け、モンキードッグとしてデビューしました。長野県では、これまでに軽井沢で残飯などを漁るクマを追い払うためにヒグマ猟用に改良されたカレリアン犬をクマ対策犬として導入した実績があります。これがモンキードッグ誕生のヒントとなったようです。

サルの被害を受けていた耕作地周辺でモンキードッグによる追い払いを行ったところ、サルの群れの移動ルートがこれまでに比べ約1.5km山側に迂回したことが電波発信器による調査で確認され、被害もほぼなくすることに成功しました。この成果を受けて、モンキードッグによるサルの追い払いは、現在までに本県の静岡市を含む23都道府県、53市町村に広がっています。現在、訓練を受けた192頭のモンキードッグが全国で活躍しています（図-1）。

訓練方法は、警察犬訓練所で訓練する方法と訓練士を派遣してもらい飼

主が訓練する方法があります。いずれも3ヶ月～半年間程度、費用は約5万円/月で、訓練の内容は以下の3点を徹底的に教え込むことがポイントです。

- ①「サルを見（察知し）たら追い払う」
- ②「呼べば帰ってくる」（どこまでも追っていかない）
- ③「人に危害を加えない」

追い払い効果を高めるには、サルの群れが近づいたらイヌを放すことと、どこまでも追って行くのではなく、あくまでも守りたいエリアから追い払うことを重視して「このエリアに近づくと危険」ということをサルに繰り返し学習させることです。

モンキードッグに必要な条件として、中型犬以上のイヌなら犬種は特に構わないとのことですが、できるだけ若いイヌの方が訓練に向くようです。

なお、前述の大町市では、モンキードッグをデビューさせる3年程前から市内に生息する12群全てのサルの群れの行動を電波発信器を用いて追跡し、行動範囲、頭数、被害時期や被害作物

等を明らかにした上で対策に取り組んでいます。話題性の高いモンキードッグだけが注目されてしまいますが、積み重ねたサルの基礎的な生息情報に基づき、効果的にモンキードッグを活用したことが成功の秘訣と言えるでしょう。

イヌとサルの関係

つい数十年前まで日本の農山村では、イヌはごく普通に放し飼いにされ、そうした環境では野生動物はときに追われ、ときには食べられたりすることで容易には集落周辺には近づけなかったと考えられます。しかし、「狂犬病」が流行し、昭和25年に「狂犬病予防法」が制定されて以降、イヌの飼い主にはワクチンの接種と繋いで飼うことが義務付けられました。また、行政は飼いイヌ以外について「野犬」狩を行ってきました。これまで心理的な障害であったイヌの恐怖が取り除かれた結果、現在では、県内の一部の地域でサルの群れが住宅地にまで進出し、鎖で繋がれたイヌをいじめたり、逆に手な付けて人の接近を知らせるように吠えさせたり、イヌの餌を食べてしまうといった被害(?)まで発生するようになってしまいました。

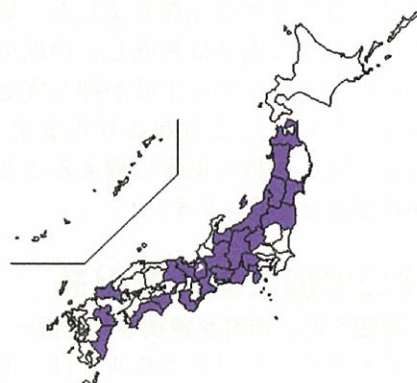
今後の対策に向けて

モンキードッグの活躍により、平成19年度に動物愛護管理法に基づく基準が改正され、これまで原則禁止であったイヌの放し飼いが、鳥獣被害の防止を目的とした追い払いなどの場合には認められることになりました。ただし、その際には、実施区域や周辺住民の間で合意形成を図っておく必要があります。

しかし、戦う相手（サル）は群れで行動する動物ですから、サルの追い払いをイヌ任せにするのではなく、周辺森林の整備、不用な果樹等誘引物の除去、耕作地の周りの柵等による防除など、サルが接近しにくく隠れにくい環境や、イヌが追いやさしい環境づくりに地域全体で取り組み、モンキードッグが働きやすいようにサポートすることが大切です。

年度	都道府県数	市町村数	20年度活用頭数	21年度活用見込頭数
H17	2	9	192	278
H18	12	20		
H19	16	34		
H20	23	53		
H21(予定含む)	23	60		

図-1 モンキードッグ活用状況
(農林水産省農業生産支援課調べ)



県庁 だより①

住民参加で減災を促進

～市町と連携で、県が進めるこれからの治山～

県建設部 森林保全室

台風や集中豪雨が起るたびに、土砂崩壊が発生し私たちの生活にも大きな被害を与えています。地域住民の防災意識を喚起し、山地災害被害を最小限に食い止めるための取組について、県森林保全室より紹介していただきました。

はじめに

本年、梅雨期の集中豪雨や台風9号に伴う豪雨により九州北部や中国、四国地方で山地災害が発生し、多くの方が命を落とされました。このように、局地的な豪雨や台風の大型化の傾向など、山地災害は依然として予断を許さない状況にあります。しかし、公共事業の削減策を受けて、治山事業についても年々、事業費が減少しており、平成21年度は、平成10年度の半分以下となっています。

このような状況の中、山地災害を最小限に食い止めるためには、市町・地域住民と連携した減災対策を進めることが重要になってきています。



▲住民と協働で現地調査

森林と地域住民の関わり

—ある地域の現状—

計画地調査などで、山の中に入ると、森林の手入れが十分に行き届かず、道もわからず、崩壊現場まで行くのに大変な思いをしたことが多々あります。地元自治会の役員の方と

話をすると、「昔はみんな山の中に入って作業をしたので、山道も森林も整備されていたが、近頃では、山に誰も入らなくなったのでどんな状況になっているか誰もわからなくなった。」というようなことを聞きます。

すべての地域に言えることではありませんが、自分たちの住む地域の森林の状況がどのような状態なのかわからないということが見受けられます。これらの地域では、知らないうちに山地の荒廃が進み、災害を大きくすることも懸念されます。

現状を知り災害に備える

—まず地域の森林に関心を持つ—

災害は、忘れた頃にやってくると言いますが、常に関心をもって自分の住んでいる地域を見ることが重要です。かつて、森林と人のつながりが密接であったころには、山菜採りや燃料としての薪ひろい、森林の管理に毎日のように人が森林に入っていました。しかし、森林と人の関係が疎遠になった近年、人は、森林に入ることはなくなりました。知らないうちに森林は荒廃し、台風や豪雨のときに一気に土砂が押し寄せてくるということも起こり得ます。森林に関心を持ち災害に備えることが重要になっています。

住民参加で減災を促進

—取組を県、市町が連携して支援—
森林保全室と農林事務所では、地

域住民に、県のホームページや冊子を配布し、山地災害危険地区情報を提供したり、協働での治山パトロールや治山セミナー、地元説明会、現地調査の協働実施等を通じて、防災意識を喚起して減災対策を進めています。

治山は、災害が発生した後の対応も重要ですが、事前に調査し、荒廃した森林の手入れを進めるなどの災害の芽を摘む取組が重要になります。災害に対応する地域の力を強めて行くことが必要です。これらの減災への取組を進めるためには、市町との連携が非常に重要になります。県では、市町と連携し、住民参加で防災対策、森林整備への取組を進めています。



▲治山事業の地元説明会



▲治山セミナー

未来へ！災害につよい森林づくり

—安心して住める豊かな地域を目指し—

昔と今では生活様式は変わったかもしれませんが、森林の恵みを楽しみ、安心して住める豊かな地域づくりが進めば良いと思います。人が森林と関わることで、多くの恵みを得、人が関わることで、森林が整備されて安心して住める豊かな地域づくりが進む。治山の取組がそのきっかけになればと考えます。

県庁だより②

林業フェスタ 山・森・人 ～ 静岡県林業者大会の開催～

県産業部 林業振興室 生産スタッフ

県林研が年1回行なう林業者大会が、静岡市の呉服町で行われました。街に住む人に山や森のことを是非知ってほしいと開催された今大会の様相を紹介していただきました。

第30回目！

9月6日（日）、静岡県林業研究グループ連絡協議会主催の林業者大会が開催されました。

林業研究グループ（以下、林研グループ、林研）とは、林業に関する知識の研さん・習得などを通じて林業経営の担い手を養成するため、地域のリーダー的な森林所有者を中心に各地に結成された組織です。

また、林業者大会は、県内各地域の林研グループの会員同士の交流や森林・林業の役割をPRするために毎年開催されています。

記念すべき第30回目の大会となった今年は、静岡市の中心部、青葉シンボルロードで開催されました。

林業者大会は毎年、各地区の持ち回りで企画運営されます。今回は静岡市林研グループが担当しました。

街の中心部で林業をPR

山や森のことを街に住む人に伝えたいと「林業フェスタ 山・森・人」と題し、山間地や郊外での開催が多い中、街中での開催とし、一般の方に参加してもらえる体験プログラムを中心に実施されました。

体験プログラムは、箸づくり、木の切れ端を材料にした端材(はざい)木工、竹工作、丸太切りです。

箸づくり体験は、天竜杉の材料を専用の道具で削り、箸にするもので、マイ箸ブームもあって注目を集めています。

端材木工では椅子やミニ縁台が、少々難しかった竹工作では一輪挿し等が林研会員の丁寧な指導により参加者の手で上手に仕上げられていきました。



▲箸づくり

また、丸太切り体験では直径15cmほどの丸太を手鋸で切ってもらうもので、円盤は参加者のお土産になりました。

「森のあずまや」や、竹を組み合わせて10人あまりが一致団結し掛け声とともに建て込む「竹のドーム」もお目見えし、道行く人々の注目を浴びていました。



▲あずまや（間伐材）

そのほかのブースでは林研の活動を紹介したパネルの展示、川根本町や静岡市林研の森林認証PRや木工品販売等が行われました。

地区対抗丸太切り競争

大会の終盤には「地区対抗丸太切り競争」が行われました。

第1ラウンドは3人一組で長さ2m、直径15cmの丸太を5ヶ所切る速さを競います。このラウンドは二組で競われ、それぞれ上位チームが決勝ラウンドに進みました。

決勝ラウンドは、長さ1m、直径30cmの丸太を切る競争です。直径が大きくなると山仕事のプロであっても鋸が思うように動かず、切れずに止まってしまうことも。街中で普段見ることのない皮付きの丸太もさることながら、製材機並みのスピードで木を切る技の物珍しさもあり、多くの見物客が集まりました。

見事優勝したのは大井川地区林研。タイムは1分54秒で2位のチームを1分以上引き離す圧勝でした。大井川地区林研には賞品のほかに、特製の切り株表彰台が贈られました。



▲丸太切り競争

今年の林業者大会は、半日の短い時間でしたが、体験プログラムだけでも約140名の方々の参加がありました。

このような大会を通じて、県林研会員相互の交流が一層進み、山間地域が元気になることが望まれるところです。また、会場に足を運んでいただいた方々が、山や森のことを考えるきっかけになれば、会員にとって、今後の活動に対する大きな励みになるというものです。

今年は、県林研発足50周年になります。このような節目の年に30回目の大会を無事に終えることができました。

林研会員の皆様、大会運営に携わった関係者の皆様、お疲れさまでした。

支部だより①

放置された間伐材を活用した緊急雇用創出事業 — 浜松市地域残材搬出事業について —

浜松市 森林課 伊東 卓純

浜松市で、本年5月から9月までに行われた「浜松市地域残材搬出事業」の概要について紹介していただきました。

浜松市の間伐事業の現況

浜松市は、森林面積10万3千haのうち毎年約2,000haを間伐しています。このうち約50%から60%が搬出され、残りは森林の中に放置された状態となっています。こうした状態を放置しておくと、木が固定化した二酸化炭素を放出してしまったり、日光を遮ることで森林の下層植生を乱し表層崩壊を招いたり、野生鳥獣の成育に悪影響を与えたりします。



▲放置された間伐材

また、山林火災が起こった場合、被害の拡大や数年後の間伐作業の効率を遅らせる要因など様々な弊害が予想されます。こうした状態の原因に、長年の木材価格の低迷があり、森林所有者は間伐材を全て搬出したくても、採算が合わないため出来ないでいるのです。

間伐材の有効利用と緊急経済対策

こうした間伐材の放置は、森林に悪影響を及ぼすと同時に、森林資源のロスにもつながります。放置されるような間伐材は、ペレットやチップなどのバイオマス資源となります。

浜松市は、平成21年2月にバイオマスタウンとして国から承認を受けたこともあり、こうした森林資源の積極的な活用が課題となっています。

一方、浜松市の経済状況は、最近の世界的な不況により、急激に失業率が悪化しました。このため、浜松市は緊急経済対策本部を設置し、その対策の一環として、放置された間伐材の有効活用を兼ねた雇用創出事業、「浜松市地域残材搬出事業」を実施しました。

この事業は、まず森林に放置された間伐材を枝払いし、4メートル以下に玉切り、搬出と集材を行う作業です。浜松市は、搬出された間伐材がチップとして有効利用できるようにチップ業者と調整しました。この事業は、天竜、春野と龍山の3森林組合で実施し、各組合はハローワークを通じて就労者を募集しました。その結果、合計で102人の応募があり、約8割が外国人労働者からの応募でした。3組合の採用結果は、日本人7人、ブラジル人とペルー人の外国人労働者11人の合計18人となりました。



▲搬出作業の様子

た。外国人労働者については言葉の問題があり、森林組合は、当初、指導方法に試行錯誤をしていたようです。

チェーンソーを使った特別教育講習会では、林業技術者協会の講師が一言説明するたびに通訳が翻訳するというように丁寧な教育を心掛けていました。今回採用された方々が、作業中にチェーンソーを自在に使っている姿を見ると、森林組合の指導者、林業技術者協会講師の指導力と雇用された方々の努力に感心せずにはいられませんでした。特に、外国人労働者については、どの組合からでも、仕事が正確で遅刻がなく、自分から仕事を探すなど、その取り組む姿勢に、森林組合の職員が刺激を受けたという声を聞いています。こうしたことから信頼感も生まれ、ある組合では、ブラジル仕込みのバーベキューパーティーを家族ぐるみで行い、親交を深めたそうです。



▲通訳を交えたチェーンソー特別教育講習会

今後の課題

この事業は、平成21年5月から9月までの5ヶ月間という期間で実施しました。この間、有効求人倍率も改善されず、今回採用された方々全てを継続雇用するに至っていません。浜松市は、この事業から、残材の収量とその収集費用について検証していきます。また、雇用創出効果と外国人労働者も含めた林業の担い手対策についても検証し、長期的な視点に立った事業展開を目指していきます。

支部だより②

沼津のシンボル 千本松原

沼津市 農林農地課

沼津市民と共に幾たびかの危機や歴史を通り抜けて、沼津市にとってはかけがえのない存在となっている千本松原を紹介していただきました。

千本松原の歴史

狩野川河口から田子の浦港まで、10kmにわたり広がる千本松原。松の常緑と白雪を頂いた富士山、そして駿河湾に沈む夕陽といった美しい自然で知られ、日本百景にも選ばれたこの景勝地は、元々、潮や風を防ぐため農民によって植えられたものでした。

その歴史は古く「平家物語」で平維盛の子六代にまつわるくだりにも千本松原の名が登場しています。

天正8年、千本浜沖で武田氏対北条氏の海戦により、松林は伐採されてしまいますが、千本山乗運寺の開祖である増誉上人という名僧が、潮風による被害が激増し苦しむ人々の姿を見かね、お経を唱えながら松苗を植え続け5年の歳月をかけて松林を復活させました。増誉上人を巡るこの物語は今なお土地の人々に語り伝えられています。

第二次世界大戦が始まると、建築資材としての伐採により、再び松原は荒れ果てました。しかしその後、地元のボランティアの植栽・管理や市の事業としての取り組みにより、素晴らしい景観をまた取り戻したのです。

このように千本松原は、幾たびかの危機に見舞われながらも、その都度人々の手によって蘇ってきました。地域生活に密着した防災林として、また、美しい景観の地として、地元の人々に愛され守られてきたのです。

現在の千本松原



▲富士山と千本松原

現在の千本松原は、県有林・私有林に所有区分が分かれており、それぞれ管理を実施していますが、個人所有の私有林は、環境の変化や所有者の高齢化等により、徐々に管理が困難になってきており、松だけでなく雑木や雑草が多く茂るようになってきました。

統一された景観を保てなくなり、今また新たな危機に直面した松原の前に、「昔から地元住民の身近にありシンボルでもあった千本松原を昔のように蘇らせよう」という強い思いから、地元住民と沼津市が協力し、平成19年度から私有林の整備が始まりました。市が事業主体になり主に雑木の除去を行い、その後地元自治会が中心となり私有林の管理を行っています。雑木等の除去を行うことで松林に光が差し込み、明るく見通しも良くなり防犯上の効果も得られています。

松林の管理は、夏場の草刈りや松苗の植栽、不法投棄等のゴミ拾いな

ど、大変な作業が多く、非常に苦勞しながらの活動ではありますが、子どもの頃から親しんできた大切な千本松原を昔のように蘇らせようと、地元住民の間で盛り上がりを見せています。

春の森づくり県民大作戦 シンボルイベント～きずな～

4月29日（水・祝）に、千本松原松長地区を舞台に、植樹イベント「春の森づくり県民大作戦 シンボルイベント～きずな～」が開催されました。地元住民や企業・ボランティア等多くの人たちが参加し、松苗の植樹・清掃活動を行いました。当日はパネル展示や地元自治会の歓迎セレモニーなどもあり、皆楽しそうに森づくり活動を行いました。地元の子供たちも大勢参加し、実際の活動を通して松原の大切さに触れる良い経験となったのではないかと思います。こうした催しや活動の一つ一つが、次の世代へ保護育成活動を繋げていくきっかけとなれば幸いです。



▲シンボルイベント植樹の様子

沼津固有の自然環境としていつまでも残しておかなければならない千本松原。四季を通じ、安らぎを求めて松原を散策する人々の姿は絶えず、幼稚園や小学校の遠足にも多く利用され、市民の憩いの場となっています。

今後とも、官民一体となり出来るだけ多くの人の協力のもとで保護育成を続けていくことが重要な課題となっており、また、この保護育成活動を通じ人と人との絆を強くしていきたい、いつまでも沼津のシンボルとして愛される松林であってほしいと願っています。

「治山セミナー」の開催

平成21年10月11日（日）、浜松市浜北区の県立森林公園において、静岡県立森林公園運営協議会主催の「森の感謝祭」が開催されました。当イベントは今年で14回目を数えますが、森林保全室では毎年、治山事業のPRのために「治山セミナー」を開催しています。

当日の開催業務は(社)静岡県山林協会へ委託して行いました。治山事業PR用のパネル展示としては、治山事業の概要を説明する「治山って何?」、山地災害を事前に察知するための情報等を説明する「山地災害に備える」、森林整備と水との関わりを説明する「水を育む森林」を掲示しました。また、それと併せ、森林に対しての親しみを感じてもらえるよう、簡単な木工作を行う体験イベントも例年同



▲治山関係パネル見学状況

様に実施しました。今年は、地元浜松在住の森林インストラクター藤田久男氏を指導員として迎え、広葉樹の輪切り材を使用して動物を作る「森のクラフト教室」を行いました。

三連休の中日で好天に恵まれたこともあり、会場には多くの来客がありました。森林保全室のブースにも親子連れを中心におよそ100人が訪れ、パネルを見学するとともに体験を楽しまれていただいたようでした。



▲藤田指導員による指導

治山事業に限らず、広報の充実は今後更に強く望まれていくものと言えます。今後も、機会あるごとに積極的にPRを行っていく必要性を感じました。

(県建設部森林保全室治山スタッフ)

事務局だより

★菊の香薫る「文化の日」を迎えました。

26回目を迎えた「しずおか森林写真コンクール」も、カメラレンズを通した森林や山村の「文化再発見活動」、とも言えます。

渾身の力作でご応募頂いた文化人の皆様、そして、審査委員長の三井章二様、有り難う御座いました。

★富士市長様には、富士山が地域力を高める不動の求心力であること、そして、その環を市や県域を越えて

拡げているお話を伺いました。

富士市民の皆様が、日本の至宝への憧憬だけでなく、その重みを背負って暮らしていることへの「自負心と責任感が『富士山文化』を培っている」、との思いに至りました。

★9月から11月の協会事業は、オペレータや指導者の養成研修、林業就業支援講習会、経営管理指導、治山セミナー、環境・森林フェア、コンクール表彰式など、人材育成や啓発に係る「種を蒔く文化活動」が盛りだくさんでした。

歴史や継続の大切さを感じつつも、

農林大学校入学生を募集!

明日の農林業の技術者を目指す高校生の皆さん、静岡県立農林大学校で学んでみませんか。

2年課程の養成部には、林業・園芸・茶業・果樹・畜産の5学科があります。林業学科では、1年次は本校(磐田市)、2年次は林業分校(浜北区)において、全寮制により実習を中心とした教育を行っています。



▲実習の様子

一般入試は、次のとおりです。
(出願期間) 12月14日～1月8日
(試験日) 1月19日(火)
(試験内容)

- 学力試験
(必須) 国語総合(漢文を除く)
(選択) 数学Ⅰまたは生物Ⅰ
- 面接

なお、短大卒以上の方を対象とした研究部も一般入試を行います。

詳細は学生課(TEL 0538-36-1560)へお問い合わせください。

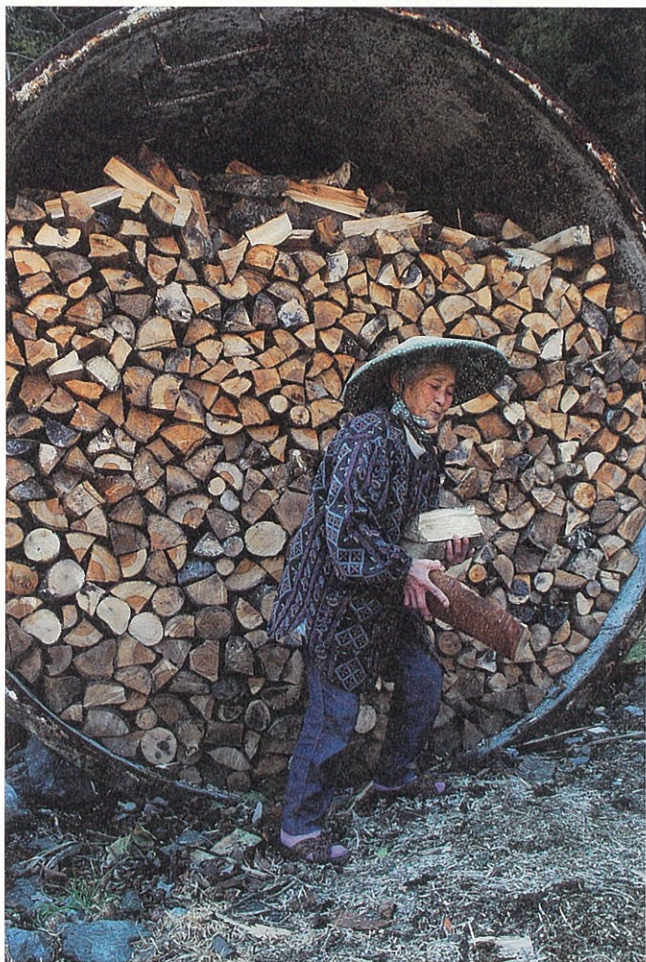
チェンジの時代に相応しい「新たな山村文化」も、早く芽吹いて、花が開き、たわわに実ることを願ってやみません。(小松)

社団法人 静岡県山林協会
静岡市葵区追手町9-6西館9F
「森と人」 TEL: 054-255-4488
編集・発行 FAX: 054-255-4489
E-mail: sanrinky-moritohito@gaea.ocn.ne.jp
http://www.moritohito.jp



この用紙は、間伐材を原料としております。

平成21年度 しずおか森林写真コンクール入賞作品



最優秀賞

環境に配慮

高山 欣也（静岡市）
撮影地：静岡市葵区田代

山歩きをする熟年男女のスナップ写真ですが、実は、背景の二本の大木を狙った作品だと思われます。人物と比較して如何に二本の杉が大木であるか一目瞭然です。カメラアングルもよくて優れた作品です。

準特選には、5点が選ばれました。

伊豆の国市の森源利氏の「樹影クロス」は、もみじの落ち葉の上に描かれた樹影をモチーフにした作品です。幾何学的な図柄が面白く、洗練された絵作りのセンスを持つベテランらしい写真です。

浜松市の伊藤正義氏の「伐採」は、杉の大木を伐採するチェーンソーの響きが聞こえて来るような迫力のある作品です。チェーンソーから飛散する鋸くずもよく捉えられています。ただ作業をする人の表情が見えないのが残念でした。

静岡市の松崎盛樹氏の「林業ひとすじ」は、杉丸太を集材する作業風景です。バックをすっきり整理して主題を際立たせることに成功しました。シャッターチャンスも良く危険な集材作業の様子がよく伝わってきます。

焼津市の青木忠平氏の「つるし柿の里」は、沢山のつるし柿を干し終えて誇らしげな老女の姿がなんとも微笑ましい作品です。画面構成もそつがなく、静かな山村風景が感じられるよい写真です。

富士市の齊藤伸也氏の「富士登山村山古道」（3枚組）は、石畳の古道、杉の古木、登山の安全を守る神社の3枚で構成された組写真です。一度訪ねて見たくなる興味深い作品です。富士山の世界遺産指定が待たれる折からPR用にもなる貴重な作品です。

このほか、入選に20点が選ばれました。

入選した作品の中にも、美しい山村風景や山で働く人達の写真など立派な作品が沢山ありました。

また、次回も多数の応募を期待して講評といたします。

審査講評

審査委員長
三井 章二



今年は、260点の応募があり過去最高の応募数でした。一般カメラマンの応募が増えたので被写体も豊富になり、立派な写真コンクールになりました。

今回、応募された半数以上の人々がデジタルカメラを使用した作品でした。写真も新しい時代の到来です。カメラの進歩も著しく、ピントは自動的、露出も失敗ない、いまや誰にでも写真が撮れる時代となりました。従ってコンクールでは技術を加味した作品評価は弱まり、被写体の魅力や表現力が重要視されるようになりました。

今年最優秀賞静岡県知事賞には、

静岡市の高山欣也氏の「環境に配慮」が選ばれました。燃料が石油やガスに替わった時代、昔懐かしい薪作りの写真です。冬に備えて大量の薪を円筒の不思議な貯蔵庫に積み上げられた様子と、編み笠をかぶって働く女性とのバランスが面白く、エコの時代にふさわしい作品になりました。

特選の静岡県山林協会賞には、鳥田市の田丸昌広氏の「山村の吊橋」と、藤枝市の小菅久平氏の「ホラホラ！セッコクが咲いているよ…」の2点が入りました。

「山村の吊橋」は、光線を考えてバックを省略し、吊橋に視線を集中させることに成功した作品です。シャープなピントでスケールの大きい立派な作品です。

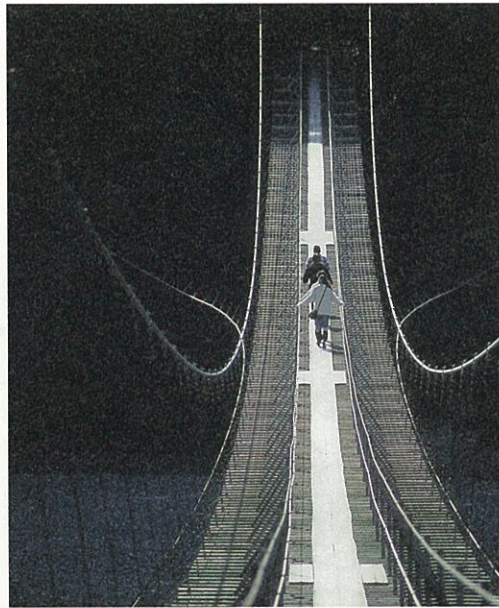
小菅氏の「ホラホラ！セッコクが咲いているよ…」は、最近よく見かける



特選

ホラホラ！セッコクが咲いてるよ…

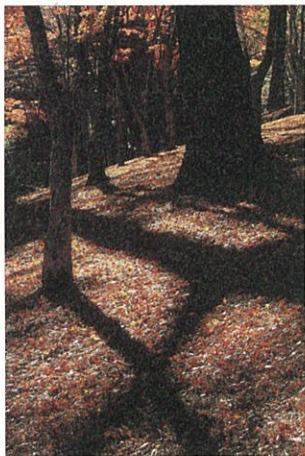
小菅 久平（藤枝市）
撮影地：島田市千葉山



特選

山村の吊橋

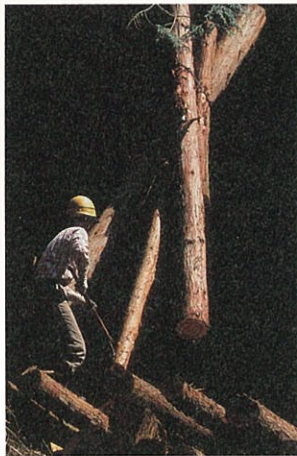
田丸 昌広（島田市）
撮影地：川根本町塩郷



準特選

樹影クロス

森 源利（伊豆の国市）
撮影地：伊豆市



準特選

林業ひとすじ

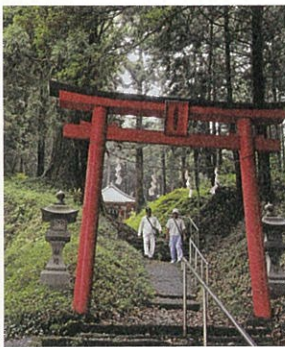
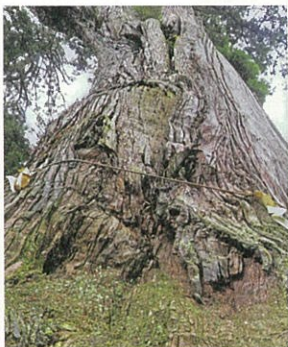
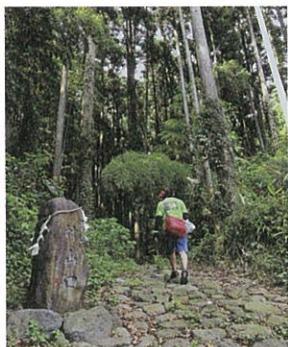
松崎 盛樹（静岡市）
撮影地：静岡市葵区有東木



準特選

伐採

伊藤 正義（浜松市）
撮影地：浜松市天竜区大栗安



準特選

富士登山村山古道

齊藤 伸也（富士市）
撮影地：富士宮市村山



準特選

つるし柿の里

青木 忠平（焼津市）
撮影地：浜松市天竜区豊岡

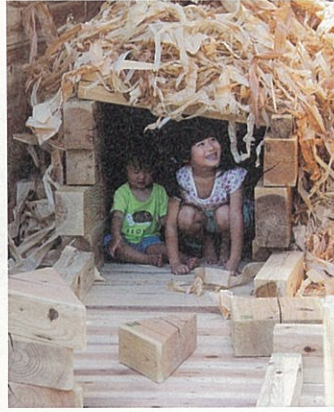


入選

美林散策

内山 出茂 (浜松市)

撮影地：浜松市天竜区龍山町瀬尻



入選

楽しいマイホーム

稲葉 浩哉 (静岡市)

撮影地：静岡市葵区中沢(杉山製材所)

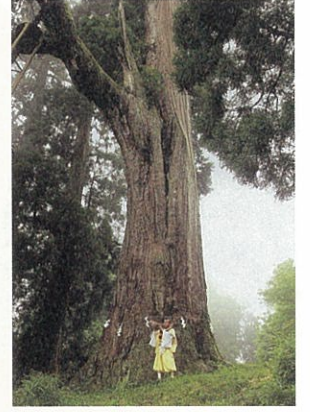


入選

**森の中でアスレチック
遊びを楽しむ子等**

鷹野 節二 (磐田市)

撮影地：浜松市浜北区(浜北森林公園)



入選

富士山山開き

高橋 利篤 (富士宮市)

撮影地：富士宮市村山

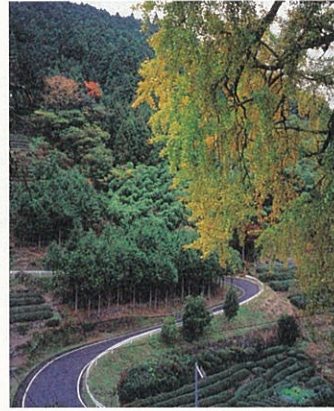


入選

山の仕事は俺の生きがい

青嶋 隆男 (浜松市)

撮影地：浜松市北区洪川

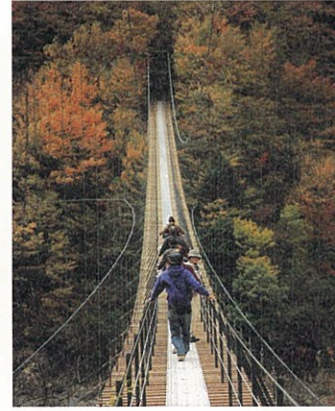


入選

里山の秋

大石 金作 (静岡市)

撮影地：静岡市葵区黒俣



入選

つり橋

鈴木 信子 (森町)

撮影地：静岡市葵区井川地区畑薙



入選

紅葉の森を抜けて

望月 正晴 (静岡市)

撮影地：静岡市葵区井川



入選

植林後の水やり

飯田 忠雄 (静岡市)

撮影地：静岡市清水区三保の松林



入選

熟練

河合 由久 (静岡市)

撮影地：牧之原市切山(榛原ふるさとの森)



入選

走る(はしる)

内田 国男 (西伊豆町)

撮影地：賀茂郡松崎町



入選

巨樹を測る

清野 博 (三島市)
撮影地：伊豆市天城山



入選

寸法きめて

石神 俊一 (焼津市)
撮影地：浜松市天竜区龍山町



入選

植樹の親子

森 勇 (静岡市)
撮影地：静岡市葵区富厚里ダイラボー



入選

山間の湖畔

鈴木 ミツヒロ (磐田市)
撮影地：浜松市天竜区相津



入選

棚田を守る人々

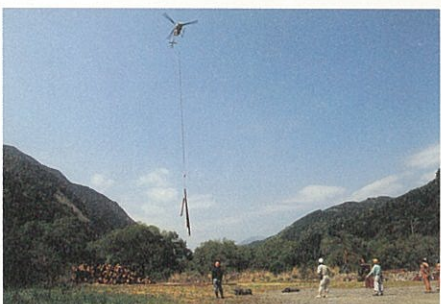
綾木 恵子 (静岡市)
撮影地：浜松市北区久留米木



入選

桐木の流れ

下村 俊明 (伊豆市)
撮影地：伊豆市修善寺梅林



入選

「ヘリ集材」

西澤 やえ子 (静岡市)
撮影地：静岡市葵区



入選

ありじごくに挑戦

深沢 真 (下田市)
撮影地：賀茂郡松崎町(牛原山町民の森)



入選

霧の富士山ろく

小柳津 友次 (静岡市)
撮影地：富士山登山道